

「実践の展望」と実践共同体

松 本 雄 一

要 旨

本論文では、「実践の展望 (landscape of practice)」と実践共同体 (communities of practice) の関連について検討する。実践の展望は Wenger (1998) において最初に提唱されており、実践共同体の概念を拡張し、実践共同体とその周辺のコテクストを統合した概念である。わかりやすくいえば実践共同体の「外の世界」について考えることができるといえよう。しかしその概念にはどのようなもので、実践共同体との関連はどのようにとらえればよいのか、先行研究はまだ少ない。本論文ではそのような問題について文献レビューに基づいて検討し、両者の概念的相違点と今後の実践の展望研究の可能性について議論する。

キーワード：実践の展望 (landscape of practice)、実践共同体 (communities of practice)、景観・風景・ランドスケープ (landscape)、能力の序列 (regime of competence)、英知 (knowledgeability)

I はじめに

本論文では、「実践の展望 (landscape of practice)」(Wenger-Trayner et al., 2014) と実践共同体 (communities of practice)¹⁾ の関連について検討する。実践の展望は Wenger (1998) において最初に提唱されており、実践共同体の概念を拡張し、実践共同体とその周辺のコテクストを統合した概念であ

1) 実践共同体については松本 (2019; 2024) を参照。

る。わかりやすくいえば実践共同体の「外の世界」について考えることができるといえよう。それまで実践共同体研究が実践共同体の外の世界を考慮していなかったわけではなく、実践共同体は学習者と状況との相互作用を念頭に置いた学習活動を考える状況的認知研究²⁾ (高木、1996) の流れから生まれた研究である。しかし実践の展望を提唱した Wenger-Trayner et al. (2014) は、それまでの実践共同体研究が単一の実践共同体を想定しており、その結果としての問題が生じているとして、複数の実践共同体を含む周囲の環境全体を考慮する必要性から、実践の展望概念を提唱している。それによってより多様で豊かな学習や実践を考えることができる可能性をもっているが、その概念にはどのようなもので、実践共同体との関連はどのようにとらえればよいのか、先行研究はまだ少ない。本論文ではそのような問題について検討し、今後の実践の展望研究の足がかりにしたい。

以下本論文では、実践の展望の前に「展望 (landscape)」概念を文献レビューによって検討する。その上で次に実践の展望の先行研究をレビューし、その内容についてまとめる。最後に考察として、実践の展望をどのように考え、実践共同体の学習にどのような可能性をもたらすかについて考察する。

II 展望の概念をどうとらえるか

実践の展望は先述の通り、実践共同体を含むコンテキスト全体を統合することにより、実践共同体の学習をより幅広く捉えることを狙いとしている。しかし実践共同体の「共同体 (community)」は先行研究が多くあり、直感的にもイメージしやすいのに対し³⁾、展望 (landscape) はイメージすることが難しい。そこで実践の展望についてみていく前に、関連研究をみていくことにする。

本論文でみていく *landscape of practice* の訳は、「実践のランドスケープ」、*「実践の景観」「実践の風景」* などともいえるが、本論文では「実践の展望」

2) 状況的認知研究については松本 (2003) においてレビューしている。

3) コミュニティ研究については松本 (2019) で整理している。

を用いる。その理由はこの場合の landscape は、物理的な環境の中の具体的な「景観」ではなく、概念としての landscape であるからである。その概念整理には、人類学における「景観人類学」、および考古学における「景観考古学」が参考になる。もちろんこれらの理論を詳細に検討することは本論文の主旨ではないため、以下では landscape 概念を検討するために、これらの理論を概観することにする⁴⁾。

河合（2020）は、まず「環境」を「人間の周りをとり囲む自然や建物などの物質」と定義した上で、景観を「人間の記憶、意味、行為が埋め込まれた環境」と定義している⁵⁾。この定義は実践の展望を考える上で示唆深い。また Cosgrove & Daniels（2001）は景観は「一つの文化的なイメージである。周辺環境を再現し、構成し、象徴化する、絵画的な手法」と定義しているが⁶⁾、河合（2020）はこの定義に代表されるように、ヨーロッパでは「人間が特定のまなざしから遠近法的に描き出した土地（環境）が、景観と呼ばれるようになった」としている⁷⁾。このように景観は、ありのままの環境ではなく、人間の認知や行為が関わっていることが特徴であるといえる。実践の展望においてもそれは共通している。

河合ほか（2023）は、人類学と考古学において景観を論じる意義について、その経緯を整理している。彼らによると、景観は人類学と考古学において長らく中心的な概念になっておらず、景観自体の研究はあったものの、学術用語として使われてこなかったそうである。しかし1980年代から英語圏で景観概念が使われはじめ研究が増加、現在は日本でも用語の1つとなり、景観人類学、景観考古学というジャンルも成立してきているそうである⁸⁾。その上で河合ほか（2023）は、「特に景観人類学という分野において、景観が、山、

4) 本節においては、景観人類学や景観考古学における landscape は「景観」と表現するが、landscape of practice における landscape は「展望」と表現する。

5) 河合（2020）、6 ページ。

6) Cosgrove & Daniels（2001：邦訳）、11ページ。

7) 河合（2020）、10-11ページ。

8) 河合ほか（2023）、3 ページ。

川、石、木といった物体だけを単に指すことはあまりない。それらは、通常、環境と呼ばれる⁹⁾として、景観と環境の違いを指摘している。続いて「景観は、単に人間をとりまく物理的な存在だけにとどまらず、さらに人間の行為、意味、思考など目に見えない（インビジブルな）要素が付帯する。人間が手を加えたり、意味づけたりすることで、山、川、石、木などは単なる物理的な環境ではなく、景観となる」¹⁰⁾として、景観には人間の行為や意味づけが関与することを述べている。そして「景観とは、目にみえる物理的側面と目にみえない非物理的側面を両輪とする概念であるといえる」¹¹⁾として、景観の二面性を提唱しているのである。この点は実践の展望を考える上で重要なポイントである。もちろん実践の展望において、具体的な場所の展望について議論することはほとんどないと思われるからである。

河合ほか（2023）は、人類学において長らく展望の概念が使われてこず、1990年代に突如注目されたのかという点を議論している。まず長らく展望の概念が使われてこなかった理由として、その指し示す範囲が明瞭ではない、展望という言葉のもつわかりにくさをあげている。景観は物理的形態を指すこともあれば、それを認知する人間の視覚イメージを指すこともあり、どこまでを景観とするかという考え方は多様であるとしている¹²⁾。この展望という言葉のわかりにくさは、本節の問題意識とも一致する。

その上で1990年頃を境として景観概念が注目されるようになった理由として、人類学における「文化表象批判」、すなわち書き手によって提示される他者の文化は、現地の客観的な姿ではなく、書き手のイメージに基づいているという批判に対し、それを脱却する糸口として着目されたことにあり、河合ほか（2023）は説明している。人々が日常生活の中で形成する景観（内

9) 河合ほか（2023）、4-5 ページ。

10) 河合ほか（2023）、5 ページ。

11) 河合ほか（2023）、5 ページ。

12) 河合ほか（2023）、6 ページ。ここでは富士山の例を挙げて説明しているが、「富士山は、歩道や神社など人間の手が加わった物理的形態であるから景観であるとする立場もあれば、『日本の象徴』として心に思い浮かべられるから景観であるとする立場もある」（6 ページ）としている。また景観と風景を区別することも難しいとしている。

的景観: inner landscape) と、外部者が外側からイメージする景観 (外的景観: outer landscape) を区別し、両者の対比と内的景観に着目することを意図することで、景観概念は発展してきているとしているのである¹³⁾。河合 (2016) は、内的景観が現地の人々の日常生活の身体実践によって環境に文化的意味を投影していくことで形成される景観であるのに対し、外的景観は他者 (学者、芸術家、実業家、施政者など) により政治経済的な目的で形成される景観であるとし、内的景観と外的景観はしばしば対立や齟齬、「競合 (contestation)」が起こるとしている。この競合は実践の展望においても存在すると考えられる。

景観人類学の研究から実践の展望に対する示唆として、物理的側面と認知的側面があること、展望を捉える上では内部的視点と外部的視点といった、多様な視点があるということであろう。そして景観が「丘、木、道、建物のそれぞれの形態や相互の位置関係を含めた総体」であるとともに、「自然と人工 (文化) を区別せず双方を包括する概念」¹⁴⁾ であることから、実践の展望は「実践共同体を含む、参加者の実践に関わる周囲の環境の構成要素の総体」ということができる。そして内的景観と外的景観の競合という考え方は、実践の展望を考える上で、実践共同体の学習に対してポジティブな影響とネガティブな影響、両方が存在することを示唆している。

他方で景観考古学について河合ほか (2023) は、海外では研究蓄積が多いものの、日本では寺村 (2014) といった先進的な取り組み以外はあまり広まっていないとしている。その上で河合ほか (2023) は、Athens (1995) の「景観考古学の重要な特徴は、土壌や断層、化石層序の記録など必要なデータを得るために、ほとんどの場合、考古学的な場所だけでなく、非考古学的な場所でも発掘調査を行うことである」¹⁵⁾ という指摘を紹介し、景観考古学

13) 河合ほか (2023)、8 ページ。同様の区別は Hirsch (1995) における、社会生活の前景 (foreground landscape) と背景 (background landscape) の分類にもみられる (p. 3)。

14) 河合ほか (2023)、8 ページ、傍点省略。

15) Athens (1995), pp.13-14.

では周囲環境の研究がより注視されるとしている¹⁶⁾。寺村（2014）も景観考古学の研究をレビューした上で、人間との関わりにおいて景観を捉えることを提唱している¹⁷⁾。

もう1つふれておきたいのは、河合（2020）の景観と「集合的記憶」の関わりについての考察である。河合（2020）は、景観には人々の共通の経験から、集団内で共有されている記憶、集合的記憶（Halbwachs, 1968）が関わっているとしている。景観を見ることで何かを思い出す（想起）、感じる（感情）ということがあり、そのような記憶・感情・価値観が共有され、その視点から景観をみることがあるとしている¹⁸⁾。この考察は実践の展望において重要である。実践共同体やその周辺における実践は、学習や知識創造につながり、それが実践に影響を与えるという考え方が、集合的記憶をもとに議論することができるからである。

景観人類学と景観考古学の研究から、実践の展望における「展望」概念について概観してきた。景観人類学における集落のような、また景観考古学における遺跡のような研究対象を考えた場合、どの程度重みをもってみることの差こそあれ、研究対象を実践共同体とすることは妥当であろう。この場合実践共同体は1つであっても複数であってもよい。むしろ Pyrko et al. (2019) のように複数の実践共同体を含むとする方がよいであろう。その上で実践の展望は、実践共同体の実践に関わる、周囲の環境を含めた総体を指し、実践者の実践や学習にかかわる周囲の環境を総合的に考慮する、と考えることができよう。共同体と風景は交差し重なり合っているのと同じく¹⁹⁾、実践の展望は実践共同体を包含するのである。そして実践の展望は、景観人類学における物理的側面や景観考古学における考古学的側面だけではなく、

16) 河合ほか（2023）、12ページ。

17) 寺村（2014）、8ページ。

18) 河合（2020）、13-14ページ。このあと河合（2020）では、関西学院大学の中央芝生（中芝）を例に、景観と集合的記憶を説明している。著者が関学の卒業生であることと、本書が関西学院大学リブレット・シリーズの一冊であることに由来している（14ページ）。

19) Stewart & Strathern (2003), p.4.

認知的側面、すなわち実践者が思い描く実践共同体とその周囲の環境の認知も含まれるとすることが妥当であると考ええる。次節からは実践の展望について検討していくが、その際には実践の展望は、「複数の実践共同体を含む周囲の環境全体」のことでありと理解するとよいであろう。

Ⅲ 「実践の展望」理論の検討

本節では、「実践の展望」理論について文献検討を行う。まず最初に提唱された Wenger (1998) について検討した上で、本格的に提唱した Wenger-Trayner et al. (2014) についてみていく。そして実践の展望について理論的に検討した Pyrko et al. (2019)、実証研究として提唱した Ackermann, Pyrko & Hill (2024) を検討するとともに、その他の研究についてもレビューしたい。

1. Wenger (1998) における実践の展望

(1) 実践の展望概念の提唱

実践の展望について最初に提唱されたのは Wenger (1998) においてである。Wenger (1998) は実践共同体の理論が提示された Lave and Wenger (1991) を発展させた研究であるが²⁰⁾、そこにおいて実践の展望の概念が「実践共同体は、自らを差別化し、また互いに連動しながら、共有される実践、境界、周辺、重なり、つながり、出会いといった複雑な社会的展望を構成している」²¹⁾と提示されている。Wenger (1998) で明確に示されているが、実践共同体は決して単一の共同体として考えられているわけではなく、周辺には他の実践共同体があり、そして実践共同体自身も「社会的展望 (social landscape) の中に位置づけられていると考えるのである。その上で Wenger (1998) は重要な注意点として2点あげている。それは、①この展望の連続性と不連続性の質感は、制度的な所属によってではなく、実践によって定義

20) Wenger (1998) については松本 (2017; 2019) を参照。

21) Wenger (1998), p. 118.

される、②このように定義された風景は、境界と周辺性の両方が織り成すものである、ということである²²⁾。1点目については、実践共同体が置かれている社会的展望の中には、参加者の所属する他の組織や共同体、および関わり合う周辺の諸要素などが含まれるが、それは実践によって定義されるということである。たとえば実践共同体のある参加者が仕事で所属する企業は実践の展望の中に含まれるが、その隣にある無関係の企業は実践の展望の中には含まれない。参加者の企業が所属する会社のビルを写真に撮ってみると、おそらくその隣の企業のビルも写真に写り込んでいるであろう。そのような意味での物理的な「風景」の中には無関係の企業も含まれているが、実際に無関係の企業は、参加者の実践の展望の中には含まれないのである。またある参加者の参加する実践共同体が勤務している会社から離れたところで活動が行われているとして、両者の距離が物理的に離れていて1枚の写真には収められないとしても、両者は参加者の実践の展望には含まれる。2点目については、自身の実践の展望に何が含まれて何が含まれないか、どの程度の範囲まで広がっているのかは、境界と周辺性が規定するもので、可塑性・可変性があるということである。参加者の携わる実践や関わり合う参加者によって決められるので、その実践の内容が変われば、実践の展望に含まれるものや範囲も変わる。活動の中で新たに関係を深めた人がいれば、疎遠になってしまった人もいるであろう。いったん含まれたものが変わらず含まれるのではなく、参加者のその時々の実践によって、実践の展望はその中に含まれるものや範囲は変わっていく。疎遠になっていた高校の友人のつながりは長らく実践の展望には含まれていなかったが、あるきっかけで活動をするようになればまた含まれる、というようなことである。

(2) 実践の展望の境界と実践

Wenger (1998) においては実践の展望の提唱にあたり、実践と境界につ

22) Wenger (1998), p. 118

いて議論を深める。そこにおいてまず提示されているのが「非公式性 (informal)」という考え方である。Wenger (1998) では「実践共同体は実践に関わることで自らを定義するため、本質的に非公式である」としている²³⁾。この非公式性は実践の無秩序性や実践共同体が正式な地位を持たないということではなく、相互関与などの実践によって「形式的な描写や管理から逃れがちな有機的な方法で発展していく」²⁴⁾ということを指摘しているのである。もちろん Wenger et al. (2002) など後述に提唱されるように、制度化された実践共同体もあるが、基本的な性質として非公式性をあげているのは興味深い。

この点にかんして Wenger (1998) は、境界の考察もあわせて進めている。「実践共同体の境界は必ずしも制度的な境界に従っているわけではない。誰が属し誰が属さないのか、境界はどのように定義されるのか、どのような周辺性が開かれているのかはすべて、長期にわたる実践への関与、物事を成し遂げる必要性、可能なアイデンティティ構築の問題である」として、実践共同体の境界があらかじめ決まっているのではなくあくまで実践によって定義されるとする一方、「組織の境界線が必ずしも実践共同体の輪郭を描くとは限らない。日々の存在を注意深く観察してみると、仕事の部署、教室、委員会、近隣などが、実際には実践共同体を構成していないことがわかるかもしれない。複数の実践共同体から構成されている場合もあれば、独自の実践が十分に発展していない場合もある」²⁵⁾として、組織と実践共同体が同様の境界で定義されるわけではないことを提唱している。Lave and Wenger (1991) に代表される初期の研究においては、仕事の部署が実践共同体と同一視されていたが、その際も実践共同体の境界は実践によって定義されるという考え方は導入されていたと考えられる。実践の展望の考え方を提唱するにあたっては、制度的な境界や組織の境界はあくまで境界を決める上での手がかりに

23) Wenger (1998), p. 118.

24) Wenger (1998), p. 118.

25) Wenger (1998), p. 119.

すぎないのである。そして実践共同体は「組織全体に広がっていたり（たとえばある専門分野の専門家で構成される実践共同体が、異なる部署で働きながらも緊密に連絡を取り合っているような場合）、組織の境界をまたいでいたり（たとえば競合する企業の専門家によって、新しい技術を中心に形成された実践共同体のような場合）することもある」として、実践共同体の広がりや包摂性を提唱している。それが「官僚主義的な硬直性の中で、時にはそれにもかかわらず、物事を成し遂げるために不可欠であることが多い」として、のちに Nicolini et al. (2022) によって提唱されるように、学習やイノベーションにつながる源泉となる可能性をもっているとしているのである²⁶⁾。

もう1つ、Wenger (1998) で議論されているのが、境界と周辺性 (periphery) の違いについてである。両者は「どちらも実践共同体の『端 (edges)』、つまり他の世界との接点を指しているが、それぞれ異なる側面を強調している」として、両者の違いに着目する重要性を示している。そして「境界とは、交渉可能であろうと暗黙的であろうと、不連続性、内部と外部、メンバーシップと非メンバーシップ、包摂と排除の境界線を指す。周辺性とは、どんなに狭くても、連続性、重なりとつながりの領域、窓口や出会いの場所、部外者や新参者に提供される組織的でカジュアルな参加の可能性を指す²⁷⁾」として違いを説明している。境界は関連する2つの項を区別するものであるのに対し、周辺性は外部に対して（ある程度）開かれ、内部に続く「参加への入り口」のような意味合いがあることを指摘しているのである。しかしその参加の可能性はいつでもオープンなわけではない。Wenger (1998) は、「周辺性とは曖昧な立場である。実践は守られることもあれば、利用できることもある。メンバーになることは大変なことだと思われることもある。歓迎すべきことだと思われることもある。周辺性とは、実践へのアクセスが可能な立場であると同時に、外部者がそれ以上内部に立ち入らないようにする立場でもある²⁸⁾」として、いわば周辺性における参加の可能性をコントロール

26) Wenger (1998), p. 119.

27) Wenger (1998), pp. 119-120.

することが求められることを指摘しているのである。このあと Wenger (1998) でよく用いられるクレーム処理系の事例を用いて、医療知識を十分に備えていながらも、医者ではないという持ち場を守り、控えめな扱いを心がけていることを取り上げ、周辺性のコントロールについて議論している。これはのちにバウンダリー・ワーク (boundary work) と呼ばれる実践 (Faraj & Yan, 2009) にもつながっている。そして実践の展望について、「区別と関連、可能性と不可能性、開放と閉鎖、限界と許容範囲、閥門と通路、参加と不参加といった複雑な構造を形成する」²⁸⁾として、実践の展望においては、この境界と周辺性のコントロールに基づいた、実践共同体とそれ以外の多様な参加者や構造が含まれることを指摘しているのである。

Wenger (1998) においてすでに実践の展望における重要なアイデアが提唱されていることがわかったが、さらに本格的な議論をおこなっているのが Wenger-Trayner et al. (2014) である。

2. Wenger-Trayner et al. (2014) における実践の展望

実践の展望について本格的に議論しているのが Wenger-Trayner et al. (2014) である。彼らは多様な事例をもとに、実践の展望の理論化に向けて考察している。

(1) 問題提起

まず Wenger-Trayner et al. (2014) においてふれられているのが、実践共同体概念の限界についてである。彼らは実践共同体の研究は今も広がりを見せているものの、「実践共同体への注目は非常に生産的であったが、時として、単一の共同体や、実践共同体の周辺から中心への徒弟制の軌跡に焦点を当てすぎることにつながったと考えている」³⁰⁾としている。実践共同体への

28) Wenger (1998), p. 120.

29) Wenger (1998), p. 121.

30) Wenger-Trayner et al. (2014), pp. 1-2.

批判点は種々あげられているが³¹⁾、それぞれの論点ではなく、その背景に何があるかを議論し、Wenger-Trayner et al. (2014) ではそれが、実践共同体の「内部において何が起きているか」に焦点を当てすぎていることを指摘しているのである。加えて彼らは、「例えば（大学教育の領域では）、教育者が学生のために実践共同体を構築する、あるいは学生を学術的な実践共同体に参加させる、というような言葉で語ることが当たり前になっている。これは実践への参加としての学習という概念を有効に強調するものであるが、学生が所属する複数の共同体や、最終的な目的地が学術的共同体の外にある可能性を不明瞭にするものである」³²⁾と指摘している。大学生の例を用いているのはわかりやすい。授業の一環で大学側が実践共同体（この場合は「ラーニング・コミュニティ」の概念に近い³³⁾）を構築したとしても、学生たちがその共同体への所属のみで大学生活を送る可能性は低いし、もし彼らが授業履修後、持続的にその共同体を維持したとしても、その履修前と履修後に所属している共同体と多重所属しながら、大学生活を送ることは想像に難くない。実践共同体を単独で捉えるのではなく、他の共同体を視野に入れるというのは、先ほどまとめたように Wenger (1998) でもすでに考慮されているが、よりこの問題に焦点を当てて議論するというのが Wenger-Trayner et al. (2014) のねらいであるといえる。

その上で Wenger-Trayner et al. (2014) が考えるのが実践の展望という概念である。彼らは Wenger (1998) には「より広範な考え方が記載されており、より深く探求する価値があると考えた。展望 (landscape) というメタファーは、われわれが境界や、異なる共同体における多重成員性 (multimembership)、そしてわれわれの個人的な軌跡が複数の共同体を通過する際に直面する課題に、注意を払うことを確実にする」³⁴⁾として、実践の展望につい

31) 実践共同体への批判点については、松本 (2019) を参照。

32) Wenger-Trayner et al. (2014), pp.1-2. 括弧内は筆者補足。

33) ラーニング・コミュニティ (learning communities) は教育機関が学生のために構築する共同体である。理論については松本 (2019) でまとめている。

34) Wenger-Trayner et al. (2014), pp.1-2.

て議論する意義を述べている。ここで注目すべき表現が「個人的な軌跡が複数の共同体を通過する」というものである。後に詳述するが、実践共同体への参加や所属という考えに対して、その一過性と、境界付近で行われる実践を示す表現となっている。

その後 Wenger-Trayner et al. (2014) では、早期教育における学習支援の事例と、保護施設の高齢者の財産委任手続きにかんする事例が紹介されていた。学習支援の事例では、生徒とその保護者、そして高校の教員が、それぞれの共同体に所属しながら、三者面談ではそれぞれの立場から意味の交渉を行い、今後の方向性について議論するという事例になっているし、財産委任手続きにかんする事例では、最初は高齢者側の知識不足に対して形式的な手続きを押し通そうとした担当者が、判断を延期した高齢者側が専門家を連れてきて論点を整理し双方の関与を引き出すという事例になっていた³⁵⁾。2つの事例に共通するのは、それぞれの参加者は所属しているそれぞれの立場から、時には適切でない実践を行ってしまったり、問題解決を拒んでしまったりすること、そしてそれぞれの境界や理解を折り合わせるような実践が必要であることである。このような複雑な、しかしよくある状況を考える上で、実践の展望は有効であるとしているのである。

(2) 能力の序列とその影響

Wenger-Trayner et al. (2014) では、実践の展望について第2章で理論的に説明している。そこでは重要な用語がいくつか登場する。その1つが「能力の序列 (regime of competence)」である。Wenger-Trayner et al. (2014) においてはまず、能力 (competence) を「ひとつの実践共同体の中で交渉され、定義された『知る』ことの次元を説明するために用いる」としている。「たとえ個人によるものであっても、能力は単なる個人の特性ではない。能力とは、実践共同体のメンバーによって能力として認識される」のである。

35) Wenger-Trayner et al. (2014), pp.3-6.

能力を交渉され認識されるものとして考えているのである。その上で「何が能力を構成するかについての共同体の社会的交渉は、結果として能力の序列となる」としているのである³⁶⁾。Wenger-Trayner et al. (2014) では、実践共同体の中で個人の能力の相互交渉の結果として、誰がどのような、またどの程度の能力を有しているかが決まり、その結果として能力の序列が生まれるとする。そして「能力の序列は静的なものではない。それは個人の経験を形作るが、それによって形作られることもある。個人の経験と実践共同体の定義との間のダイナミズムの中で生きているため、安定すると同時に移り変わるものでもある」³⁷⁾として、能力の序列の相互構成的な側面を指摘しているのである。

他方で能力の序列は成員の学習にとって、ポジティブな影響とネガティブな影響があると Wenger-Trayner et al. (2014) は指摘する。まずポジティブな影響として、能力の序列が成員の学習を促進することがある。「実践共同体で学ぶということは、能力に対する主張であり、能力と個人的経験の間の調整と再調整のプロセスを伴う。新参者が実践共同体に入ってくる時、彼らの経験が実践共同体の能力を反映するようになるまで、彼らの経験を引っ張り、変化させるのは、ほとんどが能力の序列である。例えば徒弟制度ではこのようなことが起こる。逆に経験もまた、実践共同体の能力の序列を引っ張り、挑戦し、変容させることができる」³⁸⁾とする相互構成的な考え方の中で、成員の学習は状況的に導かれ、正統的周辺参加 (Lave and Wenger, 1991) における学習の軌跡を構成すると考えることができよう。

それに対してネガティブな影響は、成員の実践や学習が阻害されるということである。Wenger-Trayner et al. (2014) は、「能力への挑戦や主張が実践共同体によって拒否されることもあれば、新参者が疎外されることもある。(中略) 受容や抵抗は根拠がある場合もあればない場合もあり、政治的な動

36) Wenger-Trayner et al. (2014), pp. 13-15.

37) Wenger-Trayner et al. (2014), p. 14.

38) Wenger-Trayner et al. (2014), pp. 14-15.

機によるものでさえある。どのようなものであれ、それは潜在的に争いうるものである。能力を定義する力が危機に瀕しているのである。社会的過程としての学習は、常にこのような権力の問題を含んでいる³⁹⁾としている。このポジティブな影響とネガティブな影響は表裏一体のものである。その実践共同体にとって何が重要で何が重要でないか、どのような実践が評価される、あるいは評価されないかということによって、成員の実践や学習は影響を受ける。このこと自体はわれわれも身近な組織や実践共同体をイメージすることで容易に確認することができよう。その上で Wenger-Trayner et al. (2014) がここで指摘しているのは、結論を先取りすると、実践共同体の閉鎖性、あるいは保守性といった要因であると考えられる。もし実践共同体が閉鎖性をもっていると、能力の序列が社会性を失い、保守性によって成員の自律的な実践や学習を阻害する可能性があるとしているのである。Wenger-Trayner et al. (2014) が実践の展望概念を提唱する理由は、まさにこの実践共同体の閉鎖性・保守性を憂慮し、より社会的な性質を考慮することを目指しているといえる。

そして Wenger-Trayner et al. (2014) は、「単一の実践共同体という概念は、ほとんどの『知識体系 (body of knowledge)』の複雑性を見逃している。専門職はもちろん、非専門職であってもその職業を実践するだけでなく、研究、教育、マネジメント、規制、連合、その他多くの関連する業務に携わる、さまざまな実践共同体の複雑な展望によって構成されている」⁴⁰⁾としている。実践の展望は実践共同体に関わる多様な要素を含むことを考慮することで、その閉鎖性・保守性を打破しようとするねらいがあると考えられるのである。

(3) 実践の展望の特徴

Wenger-Trayner et al. (2014) は、「実践の展望がいかに複雑な『社会的知識体系 (social bodies of knowledge)』を構成しているかを理解するために

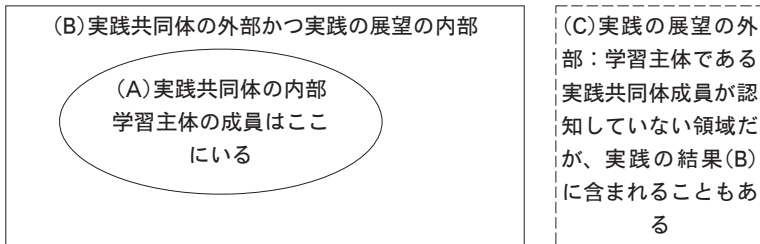
39) Wenger-Trayner et al. (2014), pp. 14-15.

40) Wenger-Trayner et al. (2014), p. 15.

は、いくつかの重要な特徴を考慮することが有効である』⁴¹⁾として、その特徴を政治的、フラットさ、多様さの3つにまとめている。この3つの特徴は、権力性、地域性、境界という、Wenger (1998) で検討した内容に由来している。

ここでの説明に入る前に、便宜的に3つの領域、すなわち (A) 実践共同体の内部、(B) 実践共同体の外部であり、なおかつ実践の展望の内部、(C) 実践の展望の外部、を想定しておくとうわかりやすいと考える。本論文では実践共同体について考察しているので、ここで主体的に想定するのは実践共同体の成員である。また (C) 実践の展望の外部はまさに便宜的に考えているだけで、実際は成員は認知していない領域である。その後の成員の実践によって、(C) のように外部にあった人々や物質、関係性や概念が、(B) に含まれることも考えられる。

図1：実践共同体と実践の展望の想定



まずは政治性 (political) とその由来となる権力 (power) についてである。実践の展望 (あるいは実践共同体) の中で、成員は「時には義務や要求に応じ、時には関連性がなさすぎるとしてすべてを受け流す。時には自分の仕事をやりながら、遵守しているように見せかけることさえある。この意味で、実践の展望は政治的である』⁴²⁾として、成員がその実践において影響を受けていることを Wenger-Trayner et al. (2014) は指摘する。また「実践の展望

41) Wenger-Trayner et al. (2014), p. 15.

42) Wenger-Trayner et al. (2014), pp. 15-16.

は競合する声と知識に対する競合する主張で構成される。これによって実践の間に知識のヒエラルキーが生まれる。このような政治的展望では、実践共同体の内部で成功した能力の主張が、それが有効である実践共同体の外での『知識』の主張につながるという保証はない。共同体の能力が知識として認められるかどうかは、実践の展望の政治的位置づけにかかっている⁴³⁾と述べている。この点は重要な主張である。ここでは能力や知識が重要であるとか有用であるという主張には、反対する主張もあり、それらの相互構成によって、たとえばある実践共同体では有用ではないとされたとしても、実践の展望の関わりの中でその有用性が認められたり、逆に実践共同体の中で成員の重要性の主張がなされたとしても、実践の展望の中でその主張が認められなかったり、あるいは成員の主張は実践共同体の中ではその有用性を主張せず、実践の展望の影響下において、実践共同体の外では主張したりといった、成員の実践がみられると考えることができる。もちろん実践の展望の内容も一様ではないので、成員が認知する実践の展望の中で、ある方面の影響では実践や学習が抑制されても、違う方面では促進されることもあるであろう。図1を使えば、(A)の中では実践が抑制されていても、(B)に出るとそれが推奨されたり、これまで意識していなかった実践の展望の外部(C)から、影響を与えるような事態が起きたりする、という具合である。

次にフラットさ (flat) とその由来となる地域性 (locality) である。この場合の地域性は Wenger (1998) から引き続いており、都市と地方という意味ではなく、どこか権力や権威を持っているところに実践や学習が集まるということではないことを意味している。Wenger-Trayner et al. (2014) は、実践共同体の中では知識のヒエラルキーが成員の実践に影響を及ぼすが、実践の展望の中では「すべての実践は実践である (all practices are practice)」⁴⁴⁾という言葉を用い、権力や規則が成員に影響を与えたとしても、それらが実践を生み出すのではなく、実践を生み出すのは実践者であるとする。また特

43) Wenger-Trayner et al. (2014), pp. 15-16.

44) Wenger-Trayner et al. (2014), p. 16.

定の実践が他の実践を包摂したり従属させたりするわけでもなく、互いに影響を与え合う。そして「このローカルな（実践に固有の）知識が、より広い展望において知識として認識されるかどうかは別として、それぞれの実践にはローカルな知識が存在する。プラクティス間のパワー・ダイナミクスの現実を否定することなく、実践の展望はフラット（flat）であるといえる」⁴⁵⁾として、実践の展望の地域性、フラットさを指摘しているのである。地域性は実践や学習が能力の序列や知識のヒエラルキーから影響を受けるとしても、成員の実践や学習そのものを規定したり従属させたりはしないということの意味している。

もう1つは多様さ（diverse）とそれを生み出す境界（boundary）である。境界は Wenger (1998) より引き続く彼らの重要な概念であるが、Wenger-Trayner et al. (2014) においては、「実践の境界は避けられない。どのような深さの実践であれ、社会的学習の歴史が維持されていることが必要であり、この歴史が共有されていない人々との間に境界が生じる」とし、「歴史の共有の欠如により、境界は異なる能力の序列から生じる、潜在的な誤解と混乱の場となる」としている⁴⁶⁾。このことから複数の実践共同体を含む実践の展望を考慮することが重要であることは先述の通りであるが、同時に Wenger-Trayner et al. (2014) は、「同時に、境界は予期せぬ学びの可能性を秘めている。視点が出会うことで、新たな洞察や根本的な革新、大きな進歩がもたらされることもある」「もちろん新たな洞察が保証されるわけではないし、無関係になる可能性もある。実際に能力は境界によってはあまり定義されない。その結果、イノベーションの可能性は大きくなるが、時間を無駄にしたり、道に迷ったりするリスクも大きくなる」として⁴⁷⁾、境界での出会いが新たな学習の契機となること、それは必ず成果につながるわけでもないことを示している。そして「実践の展望の統合には、境界の横断、境界の出会い、

45) Wenger-Trayner et al. (2014), p. 16.

46) Wenger-Trayner et al. (2014), p. 17.

47) Wenger-Trayner et al. (2014), pp. 17-18.

境界のパートナーシップが必要である」⁴⁸⁾として、実践の展望をうまく学習につなげていくためには3つの境界のマネジメントが必要であることを提唱しているのである。

このように Wenger-Trayner et al. (2014) は、実践の展望の特徴として政治的、フラットさ、多様さをあげている。それは実践共同体およびそこにおける学習に対して、抑制する可能性もあれば、促進する可能性があることを示している。その両義性に対してマネジメントが必要であるということを理解すれば、実践の展望を学習を促進する方向に機能させる可能性をもつことができるのである。

(4) 実践の展望を旅する学習

Wenger-Trayner et al. (2014) が実践の展望概念を提唱する意義としてもう1つあげられるのが、彼らのいう「実践の展望を旅する学習」(learning as a journey through a landscape) である。学習に旅のメタファーを用いるこの考え方は非常に示唆深い。

Wenger-Trayner et al. (2014) は、「知識体系が実践の展望であるとすれば、われわれの個人的な学習経験は、この風景を旅することであると考えることができる」「社会的展望を通過する軌跡として、学習とはたんに知識を得ることではない。学習とはその展望に住む一人の人間になることであり、そのアイデンティティは、その展望を通してのわれわれの軌跡を反映した、ダイナミックな構造を持っている。実践の中やそれを越えたこの旅がわれわれ自身を形成する。時間とともに、記憶、能力、重要な形成的出来事、物語、人々や場所との関係などが蓄積されていく。また方向性や願望、今後の軌跡をガイドする自分自身が反映されたイメージを提供する。言い換えれば、旅は過去と未来を現在のアイデンティティの体験に組み込んでいるのである」としている⁴⁹⁾。この記述、特に軌跡 (trajectory) という言葉から、Wenger-Tray-

48) Wenger-Trayner et al. (2014), p. 18.

49) Wenger-Trayner et al. (2014), p. 19.

ner et al. (2014) が、Lave & Wenger (1991)、Wenger (1998) から引き継いでいることがうかがえるであろう。周辺からの十全的参加を通じた正統的周辺参加 (legitimate peripheral participation) を学習の軌跡とした Lave & Wenger (1991)、その一方向的な参加のあり方を見直し、参加と不参加のあり方を通じたアイデンティティ構築を考察した Wenger (1998) とつながっているのである。そして参加を通じて実践共同体の一員になることが学習であるという従来からの立場を踏襲しつつも、旅というメタファーを用いることで、その参加の容易さ、実践共同体の閉鎖性の除去といった意味合いを持たせていると考えられるのである。そして「実践の展望への参加は、アイデンティティの経験を構成する質感を提供する。旅を通して、展望はわれわれ自身の経験を形作る。実践、人々、場所、能力の序列、共同体、そして境界が、われわれ自身の一部となるのである。展望を旅することによって構築されたわれわれのアイデンティティは、展望の経験によってそれを体現するようになる。われわれのアイデンティティは、実践の展望とその実践、そしてその境界線の個人化された反映となる。学習のための作業台として、われわれのアイデンティティはこれらの関係を再生し、再構築する」⁵⁰⁾ という記述からは、アイデンティティ構築が実践の展望の中で、相互構成的に行われることを指摘している。もう1つ旅のメタファーを用いる理由として Wenger-Trayner et al. (2014) は、「もちろん、われわれが接するすべての慣習や越える境界が同じ意味を持つわけではない。われわれの旅は、展望の中の場所とさまざまな関係を作り出す。完全に入り込む場所もあれば、訪れたり、ちらっと見たり、あるいはまったく無視する場所もある。深く探求する場所もあれば、異国のままの場所もある。強く共感するものもあれば、軽く共感するものもあり、まったく共感しないものも多い。あるものは去り、あるものは距離を置く。旅の比喩の危険性は、これらの関係がたんなる個人の決定に過ぎないと思われることかもしれない。しかし (中略) 歓迎される地域もあ

50) Wenger-Trayner et al. (2014), pp.19-20.

れば、拒絶される地域もある。辛い疎外感を味わうこともあれば、前進するチャンスを得ることもある。そのすべてを通じて、旅は同一化と非同一化の両方の経験を通じてわれわれを形作る」⁵¹⁾と述べている。同一化 (identification) と非同一化 (dis-identification) は Wenger (1998) から続く概念で、アイデンティティ構築そのもの、および実践共同体 (や実践の展望) におけるアイデンティティを取り入れるように構築する行為が同一化、取り入れないように構築する行為が非同一化である。われわれも旅行の際にこのような気持ちになったことはあるであろう。実践の展望は、そこへの参加を旅と表現することで、そこへの初期的なアクセスの容易さ、それと対照的な参加の困難さ、そして程度にもよるが一定の「退出可能性」のようなものを示しているといえる。実践共同体は、領域に関心をもつということを通じて、参加を促進する。しかしその前の段階、すなわち領域に関心を持つ経緯や過程、どのようにして実践共同体にアクセスできるようになるのかといった過程はあまり論じられてこなかった。実践の展望と実践共同体の相互構成的な関係性に加え、その外側のダイナミズムや過程を論じることは、実践共同体の学習に有益な示唆を加える。

(5) 実践の展望におけるアイデンティティ構築と英知

アイデンティティ構築については、Wenger (1998) の3つの実践、すなわち関与、想像、整合を引き継いでいるが、Wenger-Trayner et al. (2014) はこれが実践の展望の中で広がりを見せることを指摘している。簡単にいえば関与は実践に参加したり問題に取り組んだりすることであり、想像は自身の学習や実践について想像することで、省察の意味合いもある。そして整合は関与と想像のバランスをとったり、実践をうまく進める上で実践の展望における周囲の環境やステイクホルダーとの作業である。3つの実践は実践の展望においても重要であり、1つの実践共同体だけでなく周囲の状況を考慮す

51) Wenger-Trayner et al. (2014), p. 20.

ることは関与において求められる。想像は実践共同体においていかに実践の展望における多様な環境やステイクホルダーと結びついているかを考慮することである。そして統合は実践共同体が学習や実践を進めていく上で実践の展望における周囲との折り合いをつけることでもある。

実践の展望において Wenger-Trayner et al. (2014) が提唱している概念が英知 (knowledgeability) である⁵²⁾。この概念は、「われわれが能力 (competence) を、一つの実践共同体の中で交渉され、定義された『知る』ことの次元を説明するために用いるのに対して、英知は実践の展望全体にわたる多様な実践と人の関係において現れる」⁵³⁾「われわれは、実践者が自らの実践において有能であることを期待すると同時に、彼らの専門に関連する実践の展望における実践に関しても知識があることを期待している」⁵⁴⁾とされており、能力との比較で理解するとわかりやすい。すなわち能力は単一の実践共同体の中で主張されるものであるのに対し、実践の展望全体の中で主張され、説明され、証明するのが英知である。そして英知は実践の展望におけるアイデンティティ構築に影響を与えるのである。

3つの実践、同一化と非同一化、そして英知は複雑につながりあっている。「関与、想像、統合を組み合わせることで、展望への参加は、同一化と非同一化の複雑な結びつきを生み出す。われわれの軌跡は、実践の展望の中を旅し、文脈を越えてアイデンティティを持ち運ぶ中で順次発展していく。また、いつでも複数の場所や境界との同一化を経験するため、同時進行的でもある。われわれは、このようなアイデンティティのすべての形態を、たんに共存するものであれ、補完しあうものであれ、高め合うものであれ、対立するものであれ、一度に、そして一つの身体で経験する。興味深い疑問は、このよう

52) knowledgeability の訳語は筆者による。knowledgeability は「知識の所有によって証明される知恵 (wisdom as evidenced by the possession of knowledge)」とされる (Vocabulary.com Dictionary, Vocabulary.com, <https://www.vocabulary.com/dictionary/knowledgeability>. Accessed 18 Sep. 2024.)。たんにカタカナにしても説明不足となるため、訳語をあてている。

53) Wenger-Trayner et al. (2014), p. 13.

54) Wenger-Trayner et al. (2014), pp. 22-23.

な同一化の結びつきが、どのようにして知識という首尾一貫した経験となるのか、ということである」⁵⁵⁾という指摘にはいくつかの示唆が含まれている。まずアイデンティティ構築は実践の展望における旅の中で順次発展すること、また複数の場所や境界において同時進行的であることである。職場や家庭だけでなく、実践共同体やサードプレイス（松本、2022）、取引先や地域コミュニティといった多くの場所、多くの境界において実践が同時進行的になされることが前提となっている。そしてそのような同一化の結果、どのように「知識という首尾一貫した経験」となるのか、そこに英知が影響するということである。この点について Wenger-Trayner et al. (2014) は、英知が同一化を調整することを指摘している。「実践者は、自分の役割を交渉し、貢献を最適化し、関連する知識の源泉がどこにあるかを知り、予期せぬあいまいな状況に対してさまざまな知識の源泉を持ち出すよう実践する必要がある。この視点から、知識とは即興的なダンスであり、その中で同一化は調整される」⁵⁶⁾という説明から、実践の展望の中で、英知が同一化を「調整 (modulate)」することがわかる。たとえばある実践共同体における能力の主張や証明がうまくいかなくても、実践の展望レベルで考えた場合、そこになんらかの影響を与えうることである。また同一化における表現可能性 (expressibility) という用語でもそれを説明している。「実践の展望における英知を完全に実現するためには、ある場所に対する説明責任が別の場所でも表現可能であることが必要である。しかし、説明責任と表現可能性は相反することがある」という言葉は、自身の能力や英知を説明や表現しないという実践もあるということである。もちろんその実践にはポジティブな影響とネガティブな影響がある。しかし同一化と非同一化、参加と不参加という Wenger (1998) から続く考え方からすると道理であるといえる。そして「実践の展望における学習を概念化する1つの方法は、英知を同一化の調整として考えることである」として、実践の展望において何に取り組み何に取り組み

55) Wenger-Trayner et al. (2014), p. 22.

56) Wenger-Trayner et al. (2014), pp. 23-24.

ないか、何を取り入れ何を取り入れないかという調整が、同一化において重要である。このように実践の展望における学習やアイデンティティ構築における英知のあり方を考えることが求められる。

(6) Wenger-Trayner et al. (2014) における実践の展望

Wenger-Trayner et al. (2014) における実践の展望の理論的説明は上述の通りである。その後は事例研究として、多様なインタビューの語りをもとにしたさまざまな事例が紹介される。特にアイデンティティ構築における英知の役割とそれによる実践を、Wenger-Trayner et al. (2014) では「アイデンティティ・ワーク (identity work)」と呼んで重視している。しかし全体的にこれまで述べてきた実践の展望理論の、事例的説明を行っているといっただけであろう。また実践の展望における多様なステイクホルダーをいかにまとめあげるかという「呼びかけ (system conveying)」という概念は、Wenger-Trayner & Wenger-Trayner (2021) で議論される。これについては別稿でレビューする。

Wenger-Trayner et al. (2014) は、実践の展望の概念を世に問うている研究となる。重要なのはなぜ実践共同体だけでなく、実践の展望を提唱するかという点であろう。それについては、単一の実践共同体の中での学習という枠組みでは、能力の序列といった問題を乗り越えることができないという限界を克服するためであった。また複数の実践共同体を含む実践の展望のレベルで学習やアイデンティティ構築を行うこと、そこにおける英知の影響など、有益な議論につながる問題意識が多く提示されているといえよう。

3. そのほかの実践の展望研究

Wenger-Trayner et al. (2014) 以降、実践の展望を扱った研究は少しずつ出てきている。以下ではその理論的検討の代表としての Pyrko, Dörfler, & Eden (2019)、実証研究である Ackermann, Pyrko & Hill (2022)、およびその他の研究についてレビューする。

(1) Pyrko, Dörfler, & Eden (2019) における実践の展望

Pyrko, Dörfler, & Eden (2019) は、Wenger-Trayner et al. (2014) に至るまでの実践の展望概念を検討し、経営学研究の可能性について議論している。彼らは実践の展望は、異なる実践共同体同士がどのように相互作用し、依存し合い、互いの実践に基づく知見に説明責任を持つことができるかを説明するために導入されたとしている。その上で2つのテーマについて検討している。第1に、組織横断的な実践の展望の概念モデル提案である。彼らは同じ実践の展望の中にある様々な実践共同体が、それぞれの実践に基づく知識という点で、互いに説明責任を負っているとみなすのに役立つとしている。そして実践は本質的に同時進行的であることと、実践の展望の中の実践共同体は、最も活動的なメンバーのローカル集団であるコアを持つものとして記述することをあげている⁵⁷⁾。実践の同時進行性は、実践の展望の中で複数の実践共同体に所属しているとしても、それぞれの実践共同体での経験がその個人の学習やアイデンティティ構築に影響することを示している。そして「最も活動的なメンバーのローカル集団であるコアを持つもの」という記述は、実践共同体にはコア・メンバー、中心になって学習や活動を行う人々がいることを示している。それはすなわち、実践の展望におけるコア・メンバーの存在が議論されうることである。

そして Pyrko, Dörfler, & Eden (2019) は、実践共同体の機能について整理した上で、境界、特に彼らのいう「認識論的境界 (epistemic boundaries)」について検討している。認識論的境界は組織的境界に対して、学習、意味、アイデンティティに基づく境界で、あいまいで柔軟なものである。それは学習の機会にもなるが、異なる実践共同体間で意味を共有することは、同じ境界の中で学ぶよりも難しい。その上で実践の展望を、実践共同体よりも広く緩やかな概念として位置づけている。

57) Pyrko, Dörfler, & Eden (2019), pp. 483-484.

表1：複数レベルでの実践⁵⁸⁾

実践のレベル	範囲	構造的特性	認識論的特性
実践共同体 (communities of practice)	ローカルな共同体	実践者はつながり合い、相互に関与する	交差されたローカルな実践
実践のネットワーク (network of practice)	ローカルな文脈を超えたネットワーク	実践者はつながっているが、必ずしも相互に関与している必要はない	同じ実践への志向
実践の展望 (landscape of practice)	ローカル共同体の総体	関連する共同体間の境界と周縁が織りなすもの	ローカルな共同体の創発的全体性として、同じ「知識体系」による同一化

そして実践の展望は、実践者はローカルな実践の複雑な地理の中で、自分の道を主体的に見つけ、そうすることによって、自分の能力を開発するための社会的空間として、どの実践が自分にとって最も重要であるかを徐々に発見していくとしている⁵⁹⁾。Pyrko, Dörfler, & Eden (2019) は実践の展望に、学習者の主体性をより重視する視点を見いだしている。そして組織的境界を越えて広がる点を強調しているのである。

Pyrko, Dörfler, & Eden (2019) は、実践の展望は実践共同体の集合体であるとする立場をとる。そして実践共同体だけでなく、実践共同体間、実践の展望において、実践は時に価値観や嗜好の対立といった緊張や葛藤の場となること、それを乗り越えることで意味とアイデンティティを確立していくことを指摘している⁶⁰⁾。彼らは一般的な実践（誰でもやったりできたりすること、どこでも簡単に移転したりできる）と、実践共同体における実践（実践共同体の中で特徴付け学べること、実践共同体の境界を越えて移転することはやや困難）、そして実践の展望における実践を区別し比較している。実践の展望は、実践共同体間の多層的な実践を捉え、個人がその中で実践共同

58) Pyrko, Dörfler, & Eden (2019), p. 486 をもとに、筆者作成。

59) Pyrko, Dörfler, & Eden (2019), pp. 486-487.

60) Pyrko, Dörfler, & Eden (2019), p. 487.

体に参加したり、ローカルな実践を行い、主体的・創発的に実践を行うような現象を扱うのに役立つレンズであるとしているのである⁶¹⁾。

そして Pyrko, Dörfler, & Eden (2019) は、組織横断的な実践の展望のモデルを提唱している。このモデルは複数の実践共同体、複数の組織に所属する個人が多様にかつ相互に関わりながら実践していくつながり全体を実践の展望としていることがわかる。そして Pyrko, Dörfler, & Eden (2019) はこのモデルを、ミニケースをもとに説明・考察している。そしてローカルな実践共同体をより広範な実践の展望に属するものとしてとらえることが有益であること、実践共同体同士の結びつきや学習を実践の展望レベルで捉えること、実践を一般的な実践・実践共同体における実践、実践の展望における実践と3つのレベルで捉えることの有効性を指摘しているのである⁶²⁾。

Pyrko, Dörfler, & Eden (2019) は文献検討と小さな事例の検討を通じて、実践の展望と実践共同体の関係性について考察している。そこから実践の展望のレベルで学習をとらえることの意義を提唱している。

(2) 実践の展望の実証研究

Pyrko, Dörfler, & Eden (2019) を契機として、まだ現時点で数は少ないものの、いくつかの実践の展望にかんする実証研究が出てきている。

Ackermann, Pyrko & Hill (2022) は、グランド・チャレンジ (Grand Challenge)、すなわち「もし取り除かれれば、重要な社会問題の解決に役立ち、広く実施されることで世界的な影響を与える可能性が高い、特定の重要な障壁」⁶³⁾とされる大きな社会問題 (George et al., 2016) の解決に、実践の展望は資するとして議論している。グランド・チャレンジの解決には、多様なステイクホルダーがオープンな実践に従事する必要があり (Whittington & Yakis-Douglas, 2020)、複雑で相互に関連する問題に対処するためには、組織

61) Pyrko, Dörfler, & Eden (2019), pp. 488-489.

62) Pyrko, Dörfler, & Eden (2019), pp. 487-491.

63) George et al. (2016), p. 1881.

の境界を越えた職業的ネットワークやコミュニティを発展させることが不可欠であるという問題意識をもちながら、境界を越えて実践者や実践共同体をマネジメントすることの困難さに直面するとしている⁶⁴⁾。

その上で Ackermann, Pyrko & Hill (2022) は、状況的学習を促進し、グラウンド・チャレンジに取り組む上で、実践の展望を活用するための教訓を引き出すため、メンタルヘルスの問題に取り組むネットワーク組織を調査している。その結果、①実践の展望の目的の決定と正当化、②実践の展望に基づくガバナンス構造の展開、③実践の展望を横断するメンバーの動機づけと連結、④動員された実践の展望の価値の実証、の4つの柱というべき教訓を導いている。①実践の展望の目的の決定と正当化は、実践の展望に配置されたネットワーク内の多様な実務家の連携を確保し、実践の展望の動員を彼らや彼らの組織にとって価値あるものとして正当化するためには、目的を明確に理解することが不可欠であるとしている。②実践の展望に基づくガバナンス構造の展開は、活動の調整を改善するための実践の展望ベースの構造、役割、プロセスの展開にかんするもので、効果的な意思決定プロセスやリーダーシップの発揮が求められるとしている。③実践の展望を横断するメンバーの動機づけと連結は、メンバーの平等性の確保や心理的安全性の必要性、そして実践の展望に参加することで生じる本業との両立といった問題に適切に対処することで、動機づけと結びつきを生み出すことであるとしている。そして④動員された実践の展望の価値の実証は、他の3つの柱に関する無形の価値と、具体的な有形の成果を明確にすることであるとしている⁶⁵⁾。そして Ackermann, Pyrko & Hill (2024) は、グラウンド・チャレンジに取り組むための実践の展望を動員するフレームワークを提示して、その有効性を提唱している。Ackermann, Pyrko & Hill (2024) は事例研究を通じて実践の展望について考察しており、その意義は大きい。

Brown & Peck (2018) は、実践の展望の考え方を高等教育においてどの

64) Ackermann, Pyrko & Hill (2022), p. 3.

65) Ackermann, Pyrko & Hill (2022), pp. 14-18.

ように適用するかについて、インタビュー調査に基づく事例研究を行っている。実際の事例は実践共同体のものであったが、実践の展望の考え方から、未知の領域に足を踏み入れた参加者が、他分野の経験から英知を手に入れていることを指摘している。O'Dwyer, Hamilton & Bowles (2020) は、第1著者自身の教育実践事例を用いた事例研究（セルフ・スタディ）を行っている。小学校教師の理科教育と女子サッカーコーチを同時に実践しなくてはならなかった中で、実践をよりよく理解すること、共感を深めること、学習者を支援するために面子（facade）を捨てることの重要性を学ぶことができた。また、それぞれの経験と学びをうまく他方の仕事に活かすことで、著者に批判的な立場をとっていた同僚からの学びを促進することができたことを示している。Clark et al. (2017) は、学際的研究（interdisciplinary research）における境界横断の重要性について、実践の展望の考え方をもとに、学際的研究の事例を紹介しながら議論している。その上で、学際的研究の成功には、実践の展望を旅する学習の中で、研究者同士の人間関係に留意し、英知の形成とアイデンティティ構築のための信頼関係を構築することを提唱している。Whitworth et al. (2017) は、図書館職員が組織変革に直面するに至り、自分たちの環境を実践の展望として捉え、変化に対応してきた事例を考察している。ファシリテーション・セッションという議論の場において、参加者は自分たちの実践の展望を地図のように表現し、この図が異なる実践共同体の境界を越えることを助けたことを指摘している。実践の展望を図示することの有効性を示している。

Palladino et al. (2022) は、実践の展望を、トラウマ・暴力・インフォームド・ケア（trauma- and violence-informed care）、すなわち「トラウマ（および暴力）の影響に対する理解と対応に基づき、医療提供者と被害者双方の身体的、心理的、感情的な安全性を重視し、被害者がコントロールとエンパワメントの感覚を再構築する機会を創出する、強みに基づくケアの枠組み」⁶⁶⁾の実践に応用したアクション・リサーチによる事例研究を行っている。その結果、①成功する実践共同体には、資金、交流、協力、省察の実践が必

要であること、②実践共同体は、共同体の目標と一致し、TVIプログラムの信条に忠実であり、学際的・水平的でなければならないことを提唱している。

Hodson (2020a) は、医学教育における実践の展望について考察している。医学教育においては実践共同体の研究は十分に蓄積があるものの (Coakley & Bennett, 2020)、Wenger-Trayner et al. (2014) の研究から実践の展望の考え方を医学教育に導入することは、他の境界における学習機会を増やす意味で重要であるとしている。その上で Hodson (2020a) は、分断されている多領域との境界を見直し、基礎科学への理解や人文・社会科学の知識にも触れられるような、追加の学位のカリキュラム、選択科目への履修機会を提供し、実践の展望を旅する学習機会を与えることを提唱している。

Decker (2016) は、実践の展望が博物館学の教育にどのように適応できるかについて議論している。そして博物館学の修得には、展示空間だけでなく、知識の構築やアイデンティティの探求を促すような多様な出会いが重要であることを示している。Duarte, Culver, & Paquette (2020) は、カナダの車いすカーリングコーチの学習能力を向上させることを目的とした介入実践において実践の展望概念を導入し、「実践の展望という視点を持つことで、介入策を組み立てる際に、実践に対するシステム全体の変化を戦略的にターゲットにすることができる」とする視点を見いだしている。また Hodson (2020b) は、キリスト教普及の実践に、実践の展望概念が有効であるかについて考察している。応用的な研究であるが、「実践の風景というモデルは、牧師にとって、聖職を教会中心の暗黙の境界の中で実践されるものとみなすのではなく、境界に向かって（そして境界を越えて）移動することの価値と可能性を確認するものである」として、学習的意義を強調している。

そして Matsumoto (2024) は、陶磁器産地の事例研究を通じて、産地を大きな実践共同体ではなく実践の展望とみなすことの有効性を指摘している。それによって複数の実践共同体に所属することや実践共同体間のバランス、

66) Hopper, Bassuk, & Olivet (2010), p. 82. 括弧内筆者追記。

そこにおける作家たちの学習方略がどのように影響を受けるかといった問題を考察できるとしている。

IV 考察

前節まで実践の展望の理論について、先行研究をレビューしてきた。本節では考察を加える。その内容は、1. 実践の展望は実践共同体に代わりうるか、2. 包摂的な実践共同体と実践の展望との違い、3. 実践の展望の表象性、4. 実践の展望を考慮した実践共同体のあり方、についてである。

1. 実践の展望は実践共同体に代わりうるか

まず明らかにしておきたいのは、実践の展望は実践共同体の上位互換概念であり、代わりうる存在かという点である。これについては Wenger-Trayner et al. (2014) も指摘している通り、またこれまで見てきたとおり、実践の展望は上位互換概念ではないといえる。まず実践の展望は、単一の実践共同体を想定した際の閉鎖性からくる、能力の序列のような限界を乗り越えるために提唱されている。これによって複数の実践共同体との相互関係や、周囲の環境を含めた能力の主張といった実践を議論することが可能となる。実践の展望を用いることで実践共同体が不要になるということは、そもそも議論の目的でもないのである。次に実践の展望は、それ自体構築することは困難であるということである。Wenger et al. (2002) によって実践共同体は学習のためのコミュニティと位置づけられるようになり、知識創造や学習のために組織内外に構築することを考えられるようになった。しかし実践の展望は、展望 (landscape) 自体を作ることはできないように、成員によって構築することを考えられてはいない。実践の展望は「実践共同体の外側」を考慮に入れることを促進することができるが、それは構築するものではなく、考慮し、捉え、みなしていくものであるといえる。そして実践の展望は、実践者の学習やアイデンティティ構築のための実践を、単一の実践共同体だけではなく、複数の実践共同体、所属する組織、そして周囲の環境を含めた中で行

うことを提唱している。その豊かさを考慮するという意味で、実践の展望は有益である。

以上をふまえると、学習者が学習を行うための学びのコミュニティは引き続き実践共同体を用いることが適切であるといえる。その上でより豊かな実践のありようを考える際に、実践の展望を考慮することが重要である、そのように考えることができるであろう。

2. 包摂的な実践共同体と実践の展望との違い

前項と関連するが、実践共同体を考える上では、複数の実践共同体を包摂するような大きな実践共同体を考えることがある。これは実践の展望とは異なるのであろうか。

たとえば Wenger et al. (2002) ではグローバルな分散型共同体として、ローカルなコーディネーターをつなぐ実践共同体が考えられている。どちらかというところグローバルな実践共同体同士をつなぐネットワークという意味合いが強いが、分散型共同体は複数の実践共同体をつなぐ上位の実践共同体であり、実践共同体同士の境界横断についての萌芽的な考え方を提唱している。そして実践共同体は企業を中心としたステイクホルダーを1つの拡張的ナレッジ・システムを構築することも提唱している。

また組織と実践共同体、あるいは実践共同体間を連結し相互作用を促すために構築される。組織の中のサブグループ間 (Bechky, 2003)、顧客と企業を連結する (Dewhurst and Navarro, 2004)、さらに熟達度の高い人々を組織化する (Bosa, 2008)、そして実践共同体同士を結びつける (Love, 2009; 松本, 2019) といった目的で構築される。そして松本 (2019) における、小規模で頻繁に開催し相互作用する「熟達型」と、大規模で頻繁には集まれないが交流を進められる「交流型」の実践共同体を区別し、両者を組み合わせた重層型構造を構築するという考え方も、包摂的な実践共同体を意図している。

包摂的な実践共同体はそれ自体、実践の展望のイメージと近いものである

が、ここは別の概念として区別するのが適切であろう。それは（現時点では）実践の展望は、そのレベルで人々を集め、学習や実践のためにマネジメントしうる存在ではないからである。それに対して包摂的な実践共同体は、複数の実践共同体に影響を与えたり、実践や交流を促進したりといったマネジメントが可能である。もし実践の展望の中で複数の実践共同体が協働して動けるようになった際は、それは実践の展望がマネジメントされているのではなく、複数の実践共同体が協調している、あるいは融合していると考えの方がよい。その実践共同体同士のつながりあいを実践の展望と呼ぶことは、概念的な混乱を招くだけでなく、どこまでコントロールできるかという問題も生み出しうると考えられるのである。

3. 実践の展望の表象性

実践の展望は学習者個人、あるいは実践共同体の成員が共有するイメージであるという考え方もできるかもしれない。社会人が自分が関わり合っている相手、仕事上つきあいのある人々、それも含めた自身の仕事の世界、そのイメージをしてみたとして、これは実践の展望なのであろうか。つまり実践の展望は学習者の表象なのかという点である。

結論からいえばイメージは実践の展望の一部ではあるが、それだけではないといえる。確かに Wenger (1998) から Wenger-Trayner et al. (2014) に至るまで、想像 (imagination) は3つの実践、すなわち関与、想像、整合の1つとして位置づけられている。しかしあくまで3つの実践の1つである。そのイメージに基づいて関与や整合が行われたり、日々の実践によってイメージも変化していく。イメージから実際の実践につなげることが重要であり、それによって学習やアイデンティティ構築も促進されるといえる。実践の展望は実際に所属している実践共同体やその他の場所に加え、過去に所属していた場所、所属しているが現在の場所から離れた場所も含まれる。そして「高校の友達」や「大学に所属していた団体」といった表象的な場所も含まれる。このように実践の展望は、時間的にも空間的にも、つながりを表す

概念と考えられるのである。

しかし実践の展望を具体的に表象すること、イメージの構築は重要な行為である。それは仕事やキャリアについて省察する機会を作ることで可能となる。日々思うことはあってもそれは断片的なものにならざるを得ない。自身がどれだけ広い世界とつながっているのかを想像する行為が、実践の展望をより具体的なものにするであろう。また Whitworth et al. (2017) のように自分たちの実践の展望についてイメージし図示する機会は有効である。グループワークの機会を設けることも検討すべきである。

4. 実践の展望の研究可能性

実践の展望はこれからどのように用いることが出来、どのように研究することができるのであろうか。その可能性について議論したい。

まずこれまで実践共同体や、地域コミュニティといった概念でとらえてきた事象を、実践の展望としてとらえることの有効性である (Matsumoto, 2024)。多様な概念や場所を含む実践の展望は、その中に実践共同体を複数含むことを想定できる。これは、実践共同体の中に実践共同体が含まれるという事例 (松本、2019) とは異なる考え方で、事象を考えることが可能になり、より多くの事象を検討することができる。Matsumoto (2024) のように、実践の展望の中に複数の実践共同体が活動している場合、それらの内部で行われる学習に加え、実践共同体間の力学、そして多重所属しながらも実践の展望の中で実践する学習者に対して、どのような影響がもたらされるのか、といった考察が可能になると考えられるのである。またこれまで地域コミュニティは、実践共同体研究においてはたんなる実践共同体のある場所としか想定されず、周囲の環境はあくまで物理的な環境に限定され、それらに含まれる文化的な事象しか取り上げることができなかった。しかし地域コミュニティを実践の展望ととらえた場合、学習者の認知的な展望も含めることができる。それはある学習者にとって実践の展望に含まれる事象が、他の学習者にとっては含まれないということが考えられよう。このことが学習者の能力

の主張や、実践の挑戦に影響を与えると考えられるのである。

次に学習者個人のキャリア形成促進である。単一の実践共同体、および組織だけを想定していれば、その中における個人のキャリアは限定されたものになる。しかし外に目を向けることで、個人のキャリアはまさにバウンダリレス・キャリア (Arthur & Rousseau, 1996) となる。またキャリアは、「就職した後の生活ないし人生全体を基盤にして繰り返される長期的な仕事生活における、具体的な職務・職種・職能での『諸経験の連続』と『節目での選択』が生み出していく、回顧的展望と将来構想のセンス・メイキング・パターン」(金井、2002) と定義される。この「回顧的展望」はまさに実践の展望における多様な認知的展望であると解することができる。時間的・空間的につながりを含む実践の展望は、個人のキャリアと密接に結びついている可能性がある。そこで重要なのは、自身のキャリアがどこまでバウンダリレスなのか、という点について、実践の展望を省察してみることである。そのことでたんに観念的に理解するのではなく、自身の実践に基づいた実践の展望に、自身のキャリアを位置づけることができるであろう。また自身のキャリアを探索的に考えている人にとっては、展望を旅する学習というのは、さまざまな経験を省察する上で示唆的な考え方である。

5. 実践の展望を考慮した実践共同体のあり方

最後に、実践共同体の学習について、実践の展望を考慮することで、どのようなことが考えられるかを検討してみよう。

まず確認であるが、実践共同体の閉鎖性の打破である。能力の序列といった現象を回避し、学習を促進することができる。たとえば、ある成員が実践共同体においてその能力を認めてもらえないという状況を考えてみよう。単一の実践共同体の中では難しくても、その実践共同体の外に目を向けてみれば、自身の考え方やアイデア、実践、研究テーマ等々について関心をもつ他の実践共同体、組織、人々がいる可能性がある。他の実践共同体に参加し、アイデアが具体化したところで、もとの実践共同体に持ち帰ることで、そ

の成員の能力を認めてもらうことができる、少なくともその可能性を考えることができよう。もちろんこれは実践共同体だけではなく、企業などの組織においても同様に考えることができることは言うまでもない。

次に実践共同体の学習促進である。単一の実践共同体だけであれば、このような学びをしているのは自分たちだけという考え方になるであろう。しかし外に目を向けることで、実践の展望が徐々に広く認識できる。同様のテーマを学んでいる実践共同体、アイデアをすでに実践している企業や組織、関心を持っている人々、理論的基盤をもっている学術組織などである。そのテーマにかんする大きな実践の展望の中に自分たちを位置づけることで、新たな学びの実践が生まれると考えられる。

もう1点、実践の展望はそれ自体、あるいは実践共同体の構築に対して、「関心のない人々」をどのように巻き込むかという問題にも有意義な議論を加えることができる。松本(2020)で論じた実学集合型実践共同体(transdisciplinary communities of practice)でも課題にあげていたポイントであるが、多様なステイクホルダーはどこにいるのかといえ、おそらく実践の展望の中にいるということができよう。

V おわりに

本論文では、実践の展望概念について、文献レビューをもとに考察してきた。実践の展望は実践共同体の「外の世界」について具体的に考え、それが実践共同体の学習にどのように影響するかについて議論してきた。実践の展望はそれ自体構築するものではなく、省察することで実践共同体、およびそこにおける学習のあり方をより豊かにするものであることがわかった。

今後は実践の展望が実践共同体に対して、ポジティブにせよネガティブにせよどのような影響を与えるかを考えることが求められる。その研究はまだ途についたばかりであるが(Matsumoto, 2024)、この点を明らかにすることはさまざまな副次的成果をもたらす可能性があると考えられる。継続的な研究が必要である。

(筆者は関西学院大学商学部教授)

参考文献

- Ackermann, F., Pyrko, I. & Hill, G. (2024). Mobilizing landscapes of practice to address grand challenges. *Human Relations*, 77(5): 593–621.
- Arthur, M. B., and Rousseau, D. M. (1996). *The boundaryless career*. New York: Oxford University Press.
- Athens, J. S. (1995). *Landscape archaeology: Prehistoric settlement, subsistence, and environment of Kosrae, Eastern Caroline Islands, Micronesia: Archaeological data recovery investigation for the Kosrae Wastewater Project*. Honolulu, Hawaii: International Archaeological Research Institute.
- Bechky, B. A. (2003). Sharing meaning across occupational communities: The transformation of understanding on a production floor. *Organization Science*, 14(3), pp.312–330.
- Bosa, I. M. (2008). Innovative doctors in Germany: changes through communities of practice. *Journal of Health, Organization and Management*, 22(5), pp.465–479.
- Brown, M., & Peck, C. (2018). Expanding the landscape: Developing knowledgeability through communities of practice. *International Journal for Academic Development*, 23(3): 232–243.
- Coakley, N., & Bennett, D. (2020). Boundary learning environments in landscapes of practice. *Medical Education*, 54: 495–501.
- Cosgrove, D. & Daniels, S. (eds.) (1988). *The iconography of landscape: essays on the symbolic representation, design and use of past environments*. Cambridge; New York: Cambridge University Press. (千田稔・内田忠賢監訳 [2001]『風景の図像学』京都: 地人書房)
- Clark, J., Laing, K., Leat, D., Lofthouse, R., Thomas, U., Tiplady, L., & Woolner, P. (2017). Transformation in interdisciplinary research methodology: The importance of shared experiences in landscapes of practice. *International Journal of Research & Method in Education*, 40(3): 243–256.
- Decker J. (2016). Beyond cul-de-sac pedagogy: Museum studies as a landscape of practice. *Transformations: The Journal of Inclusive Scholarship and Pedagogy*, 26(2): 176–193.
- Dewhurst, F. W. and Navarro, J. G. C. (2004). External communities of practice and relational capital. *The Learning Organization*, 11(4/5), pp.322–331.
- Duarte, T., Culver, D. M., & Paquette, K. (2020). Framing a social learning space for wheelchair curling. *International Sport Coaching Journal*, 8(2): 197–209.
- Faraj, S., and Yan, A. (2009). Boundary work in knowledge team. *Journal of Applied Psychology*, 94(3), 604–617.
- George, G., Howard-Grenville, J., Joshi, A., & Tihanyi, L. (2016). Understanding and tackling societal grand challenges through management research. *Academy of Management Journal*,

- 59(6): 1880-1895.
- Halbwachs, M. (1968). *La mémoire collective*. Paris: Albin Michel. (小関藤一郎訳 [1989] 『集合的記憶』京都：行路社)
- Hirsch, E. (1995). Landscape: between place and space. in Hirsch, E., & O'Hanson, M. (eds.) *The anthropology of landscape: Perspectives on place and space*. Oxford: Clarendon Press, pp. 1-30.
- Hodson N. (2020a). Landscapes of practice in medical education. *Medical Education*, 54(6): 504-509.
- Hodson, M. (2020b). Landscapes of practice: A model to enrich our understanding Christian ministry? *Practical Theology*, 13(5): 504-516.
- Hopper, E. K., Bassuk, E. L. & Olivet, J. (2010). Shelter from the storm: Trauma-informed care in homelessness services settings. *Open Health Services and Policy Journal*, 3: 80-100.
- 金井壽宏 (2002). 『働くひとのためのキャリア・デザイン』東京：PHP 研究所。
- 河合洋尚 (編) (2016). 『景観人類学：身体・政治・マテリアリティ』東京：時潮社。
- 河合洋尚 (2020) 『景観人類学入門』東京：風響社。
- 河合洋尚・松本雄一・山本睦 (2023) 「人類学と考古学の景観論—その研究動向と課題」河合洋尚・松本雄一・山本睦編 (2023) 『景観で考える：人類学と考古学からのアプローチ』京都：臨川書店⁶⁷⁾。
- Lave, J. and Wenger, E. (1991). *Situated cognition: legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press. (佐伯胖訳 [1993]. 『状況に埋め込まれた認知：正統的周辺参加』東京：産業図書。)
- Love, P. E. D. (2009). Communities and champions of practice: catalysts for learning and knowing. *Construction Innovation*, 9(4), pp. 365-371.
- 松本雄一 (2003). 『組織と技能』東京：白桃書房。
- 松本雄一 (2017). 「実践共同体概念についての一考察—E. Wenger の実践共同体論を読み解く—」関西学院大学『商学論究』64(3)、347-409ページ。
- 松本雄一 (2019). 『実践共同体の学習』東京：白桃書房。
- 松本雄一 (2020). 「実学集合型実践共同体の概念的検討」関西学院大学『商学論究』第67巻第3号、21-59ページ。
- 松本雄一 (2022). 「サードプレイス概念の先行研究の検討：実践共同体との関連についての考察」関西学院大学『商学論究』第70巻第1、2号、75-106ページ。
- 松本雄一 (2024). 『学びのコミュニティづくり—仲間との自律的な学習を促進する「実践共同体」のすすめ—』東京：同文館出版。
- Matsumoto, Y. (2024). Ceramic district as the landscape of practice: A case study of knowledge sharing in the ceramic industry in Japan. *Proceedings paper for European Groups for*

67) 本書における編者の1人は本論文の筆者と同姓同名であるが別人である。しかしその縁で貴重な研究を見つけることができた。

Organizational Studies 40th EGOS Colloquium.

- Nicolini, D., Pyrko, I., Omidvar, O., & Spanellis, A. (2022). Understanding communities of practice: Taking stock and moving forward. *Academy of Management Annals*, 16(2): 680-718.
- O'Dwyer, A., Hamilton, M., & Bowles, R. (2020). Learning with and from others: Self-study of teacher education within a landscape of practice. *Studying Teacher Education*, 16: 364-384.
- Palladino, E., Darroch, F., Jean-Pierre, L., Kelly, M., Roberts, C., & Hayhurst, L. (2023). Landscape of practice: A participatory approach to creating a trauma- and violence-informed physical activity social learning space. *Qualitative Research in Sport, Exercise and Health*, 15(2): 297-312.
- Pyrko, I., Dörfler, V. & Eden, C. (2019). Communities of practice in landscape of practice. *Management Learning*, 50(4), pp.482-499.
- Stewart, P. J. & Strathern, P. (Eds.) (2003). *Landscape, memory and history: Anthropological perspectives*. London: Pluto Press.
- 高木光太郎 (1996). 「実践の認知的所産」波多野誼余夫 (編) 『認知心理学 5 学習と発達』東京: 東京大学出版会、37-58ページ。
- 寺村裕史 (2014). 『景観考古学の方法と実践』東京: 同成社。
- Wenger, E. (1998). *Communities of practice: learning, meaning, and identity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wenger, E., McDermott, R. & Snyder, W. M. (2002). *Cultivating communities of practice*. Boston, MA: Harvard Business School Press. (野村恭彦監修, 櫻井祐子訳 [2002]. 『コミュニティ・オブ・プラクティス—ナレッジ社会の新たな知識形態の実践』東京: 翔泳社。)
- Wenger-Trayner, E., Fenton-O'Creevy, M., Hutchinson, S., Kubiak, C. & Wenger-Trayner, B. (eds.) (2014). *Learning in landscapes of practice: boundaries, identity, and knowledgeability in practice-based learning*. New York: Routledge.
- Wenger-Trayner, E. & Wenger-Trayner, B. (2021). *Systems convening: A crucial form of leadership for the 21st century*. Social Learning Lab.
- Whittington, R. & Yakis-Douglas, B. (2020). The grand challenge of corporate control: Opening strategy to the normative pressures of networked professionals. *Organization Theory*, 1(4): 1-19.
- Whitworth, A., Calvo, M. T., Moss, B., Kifle, N. A., & Blåsternes, T. (2016). Mapping the landscape of practice across library communities. *portal: Libraries and the Academy*, 16(3): 557-579.